

11月10日「誰が一番悪いのか？」創世記3：1~15 ヨハネ福音書3：16~21

今日は創世記に描かれたとても有名な物語を聞きました。神さまによって創造された最初の人間アダムとエバは樂園に住んでいました。しかしそこを追われるような出来事を起こしてしまう、蛇にそそのかされた人間が禁じられた果実を食べてしまうのです。そこには4人？の登場人物が出てきます。

1、男 2、女 3、蛇

皆さんは誰が一番悪いと思いますか？色んな意見があると思います。ちなみに中学生に聞くと、4、神さまと必ず言う生徒がいます。そもそも善悪の知識の実なんて置いておくから悪いのだと。聖書において、神さまは絶対！です。どれほど理不尽だと思えることであっても神が悪いという発想は聖書にはありません。たとえば万引きとかのことを考えると、どれほど良い商品を陳列しようが店の勝手。それをお金払わずに取ったら、取った方が悪い！そんな理屈ではないだろうか？4の神さまはないということで順に見ていってみましょう。

まず蛇について考えてみましょう。神さまが地上に作った動物の中で一番賢いのは蛇でした。ここでの「賢い（アールーム）」のヘブライ語は聡明であることも狡猾であることも両義性を持つ言葉です。蛇は女を「園の中央の禁じられた果実を食べると神のように善悪を知る者となる」とそそのかしましたのでその責任は明白です。神さまから最も罰せられるのは蛇です。生涯はい回るものとされてしまいます。また、神さまは蛇を呪われます。ヘブライ語で呪うという言葉は「アールール」、賢いことを「アールーム」と言いますが、賢さ（アールーム）が呪い（アールール）を引き起こすという語呂合わせによって皮肉が含まれています。また、蛇と女は互いに憎しみ合う存在となります。古代ユダヤ教からここには蛇の子孫がサタンで、女の子孫からメシアが生まれ、メシアがサタンを打ち砕くという解釈がなされてきましたが、ここではそういう預言的な意味ではなく、賢さが憎しみを引き起こすとも読めます。

次に、女です。女は蛇の誘惑に見事に釣られてしまいました。蛇は「神のように善悪を知る者となる」と誘惑します。神のようになりたいと願う人間の傲慢さが女の行動からは見て取れます。また善悪を知るようになる、と言われて二人が気づいたことは「裸（エーローム）」であるということでした。賢く（アールーム）になりたいと願った者が気づいたことは自分は「裸（エーローム）」だったと、こちらも語呂合わせによる皮肉だと考えられます。女は神さまに責任を問われると「蛇に騙された」と蛇の責任にします。女にも神さまは告げられました。「お前のはらみの苦しみを大きなものにする。お

前は、苦しんで子を産む。お前は男を求め／彼はお前を支配する。」こうして女性には子どもを産むと言う最も大切な役割が与えられました。

最後に男です。男は 3 人のなかではいかにも責任は軽いように思えます。けれども、良く考えてみてください。女が蛇から誘惑を受けた時、男は何をしていたのでしょうか？「6 節 女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡した」そうです！男はどこか遠くにいたのではありません。側に居たはずなのに、女を止めませんでした。しかも、神さまから園の中央の実を食べることを直接禁じられたのは誰ですか？男です！神さまが女に語りかけたとは書かれていません。きっと女は男からの又聞きでしか知らなかったはずなのです。どうでしょう？一気に男の罪の重さは増すように思われませんか？それなのに神さまから責任を問われた男はこう答えます。「1 2 節 あなたがわたしと共にいるようにしてくださった女が、木から取って与えたので、食べました」。自分の責任を認めないどころか、女を与えて下さった神様を責めるかのような物言いです。責任を自分で負わず回避しようとする人間の罪と弱さが現われています。神さまは男に糧を得るために汗水流して苦勞をするようになされたのです。

こうして人間はエデンの園から追い出されることになりました。けれども、それでも神さまの祝福は人間を離れることがありませんでした。神さまは人を怒りのままに放り出したのではありません。皮の衣を造って与えられたとあります。人間を追放しながらもしかし同時に、人を思い遣り、保護される神さまの姿が描かれているのです。人間は確かに罪を犯しました。けれども、そのような人間の罪さえも覆う神の愛が描かれています。

さて、この物語から今日私が考えたことは女を唆した蛇のこの言葉です。「**それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなる**」女はなぜ禁じられた木の実を食べってしまったのでしょうか？美味しそうだったから？賢くなりたかった？もうひと押し！「神のようになりたかった」からではないでしょうか？

先日 NHK の朝の番組で特集をしていたのですが、今、世界的なベストセラーとなっている本にイスラエルの歴史学者ハラリ氏の『ホモ・デウス』があるそうです。ラテン語で「ホモ」は人間、「デウス」は神、つまり神の人、神聖な人、と言う意味です。この言葉によってハラリ氏は「今、人類は神へとアップグレードしている」というのです。

今、世界では AI やバイオテクノロジーの技術が急速に進化しています。例えばおコメなどはどんどん新しい品種が生み出されていますが、気候の変化に強く甘くて美味し

い品種同士を掛け合わせて、新しい品種をつくるのが一般的にされていますよね？あれよりもっと進んで、遺伝子を意図的に書き換えて新しい生き物を産み出すのです。例えば、牛肉の成分を含んだトマトとか、普通の2倍のスピードで成長するトラフグなどが生み出されています。これまで動物での実験まででしたが、それが人間にまで及び、最近、中国では遺伝子を操作して双子が生まれたことは大きな話題になりました。イギリスでは親から子へと遺伝する病気を治すために、遺伝子を操作する研究が進められているらしいです。このまま進むと、近い将来、病気だけではなく、容姿とか、頭脳とか、性格なんかの遺伝子を操作、設計された「デザイナーベビー」が生み出されることもあり得ます。創世記には命を生み出したのは神さまだと記されています。いよいよ、人間の科学技術は新しい生物を生み出すという神さまだけに許された領域に足を踏み入れることになる、とハラリ氏は警鐘を鳴らしているのです。

「神のようになりたい」聖書が描く人間の罪の姿です。バベルの塔の物語では神の住まう天にまで届く高い塔を人々は計画します。その思い上がりを神は打ち砕かれ散らされたとか書かれています。神様が共に居て助けてくれたサウル王ですが、王の座につくと次第に傲慢になり最期は神の霊がサウルを離れ、戦争によって非業の死を遂げます。神の恵みを自分達の力だと過信したイスラエルの国に神が裁きを下し、バビロン捕囚が起こります。人が自らの力に傲慢になり、神に成り変わろうとするとき、必ず失敗し痛い目を見てきた歴史を聖書は語るのです。

月本昭男と言う立教大学の有名な旧約学者は創世記は古代人の残した警告と知恵の物語だとしています。創世記では、アダムとエバが楽園を追われた後、物語はどうなっていくのか？カインとアベル、最初の兄弟間で殺し合いがあり、その血は大地を罪に染めたと書かれています。そして大地が人間の悪で一杯になった時、大洪水が起き、すべての生き物が死に絶えることになるのです。人間の罪が大地を汚し、他の生き物を滅ぼしていきます。考古学的な発掘から、ある時代までパレスチナ地方には野生のクマがすんでいたことが分かります。足跡や骨の化石があるのです。けれども、ある時点を境に熊の痕跡は途絶えてしまいます。代わりにある者が発掘されるようになります。人間の住居跡です。つまりパレスチナ地方では人間の住環境の拡大によって熊が絶滅したのです。ですから聖書の時代には環境破壊、人間の罪の結果が大地に甚大が被害をもたらすことが知られていたというのです。この創世記はそのような人間の罪の結果を警告しているのだというのです。

すでに人間の科学技術は恐ろしい現実をたくさん引き起こしていると思います。核兵

器は、地球を何度も破壊できるだけの威力を既に持っています。そんなものを使ってしまうえば、敵だけでなく人類すべてが滅んでしまうのに、各国は競って製造し続けています。私たちの国も唯一の被爆国であるにもかかわらず、東日本大震災の原発事故を引き起こしました。私は、被災者支援の活動を続ける中で、避難区域に指定されている福島県の浪江町に行ったことがあります。そこは本当に「ゴーストタウン」でした。生活の後だけ残り誰も居ない寂しい町。持参した放射線の測定器で測ると、人の健康に著しい不調をもたらす値が計測されます。自然が溢れる豊かな町を人間の愚かさが動物の住めない場所にしてしまったのです。人間の罪の結果、私たちの暮らす大地は存続の危機に立たされています。

環境破壊は恐ろしい速度で進み、地球の気候変動が止まりません。どうやら温暖化はあと 10 年で踏みとどまることが出来なければ、地球が灼熱の星になってしまう可能性も指摘されています。神に成り変わろうと科学技術を発展させてきた結果、私たち人間は本当にギリギリの、引き返せるかどうかの瀬戸際に立っているのでしょうか。

科学は事実と技術は提供しますが、それが本当に正しいのか、非人道的で間違っているのか倫理的な価値判断は示しません。よく知られたことですが、ノーベルは最初、土木作業で多くの人命が失われるのを悲しんでダイナマイトを開発したのです。けれども、人間はそれを戦争で人を殺す道具にしてしまった。それを悲しんだノーベルが世界的な賞を創設しました。新しい技術の「善悪」を示しうるのは宗教のみかもしれません。私の卒業した関西学院大学神学部では在学時頃から、近くの兵庫医科大学と提携して「生命倫理とキリスト教」を研究するようになりました。医療に従事する者と神学に携わる者が協力して、新しい技術の倫理的な判断に携わろうとの考えからです。実は宗教は世界の最先端で必要とされています。

今日は個人とか教会とかいう単位ではなく人間存在の話をしました。私たちは今、科学の発展によって、このまま罪にまみれて滅びの道をたどるのか、踏みとどまって命の道を行くのか本当にギリギリのところ立っているのでしょうか。今日の福音書の言葉です。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」そのギリギリの判断を為す為に、聖書に真剣に聞き、本物の価値を知り、命の意味を改めて私たちは受け止めなおす必要があります。神は私たちに永遠の命を与えるために、御言葉を与えられたのです。